

『「武道等指導推進事業（武道等の指導成果の検証）」調査報告書』 を受けて一中学校武道（柔道）指導の改善の方向性一

磯村 元信（東京都立秋留台高等学校）

1 中学校武道（柔道）指導の成果検証の概要

武道の必修化から3年を経て武道場の整備や授業協力者の配置は徐々に進んでいるが、教育委員会の1/4が大外刈りなどの技の制限を行っている。抽出校の9割が第1学年、第2学年ともに9時間ずつ計18時間の武道授業を実施している。そのうち半数が第3学年でも9時間計27時間実施している。柔道を指導する教員の9割が柔道を専門としない教員である。指導内容の習得状況を教員と生徒を対比して検証した結果、「態度」は十分に満足な結果であるが愛好的態度に課題があり、女子にその傾向が強い。「知識、思考・判断」も概ね満足な結果であるが課題解決の仕方に課題がある。「技能」は努力を要する結果であり、技能の指導状況や習得状況に課題がある。教育委員会で指導を制限されているが生徒の「できる」という実感が一番高い大外刈りの扱いが課題である。

2 改善の方向性

「態度」は、柔道の授業を好きになる、積極的に取り組むなどの愛好的な態度の育成が求められる。特に女子の運動習慣の乏しさや運動嫌いの傾向から、女子の興味・関心を高める指導の充実が求められる。（※平成25年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査より）

「知識、思考・判断」では、生徒相互の学び合いによる課題解決の道筋を示すなどのアクティブ・ラーニングの推進が求められる。

「技能」では、「できない」「指導していない」理由として授業時数の問題が挙げられている。しかし、抽出校の9割が第2学年までに18時間の授業時数が確保されていることから、第1学年から第2学年への発展性のある単元計画により効率的な技能習得を促しながら創意工夫する楽しさや攻防する楽しさなど柔道本来の楽しさを味わわせる工夫が求められる。

大外刈り（刈り技系）の扱いについては、後ろ受け身の習熟を主なねらいとすることを明記してこれまで通り基本となる技として扱うこととするか、基本となる技から外し、受け身の習熟する第3学年以降の発展的な技としての扱いとすることなどが考えられる。

いずれにしても次の学習指導要領の改訂に向けて、より柔道のよさや楽しさに触れる工夫や3年間を見通した発展的な単元計画の作成ができるように、技の例示の在り方や技の配列例などの検討も含めて改善の方向性を提言としてまとめる必要がある。

プロフィール：東京都立秋留台高等学校 校長，文部科学省 柔道指導の手引 二訂版 作成委員，文部科学省 柔道指導の手引 三訂版 作成委員 DVD作成委員，東京都教育委員会 武道資料事例集 作成委員，全日本柔道連盟 教育普及委員，全日本柔道連盟 中学校武道必修化プロジェクト委員

『「武道等指導推進事業（武道等の指導成果の検証）」調査報告書』を受けて（剣道）

柴田 一浩（流通経済大学）

【調査結果の概要】

1 剣道の実施状況

有効回答が得られた1,084市区町村管内の5,432校の調査結果から、剣道を実施している学校は約35%で、そのうち1年及び2年のいずれの学年でも実施している学校が約90%である。3年でも約20%の学校が剣道を実施している。指導時間は1年から3年まで、平均で約9単位時間である。

2 剣道の指導及び学習の状況

有効回答が得られた181校の教員181名、生徒5,549名の調査結果から、特筆する事項は下記のとおりである。

- (1) 保健体育の授業が好きと回答した生徒が83.8%であるのに対し、剣道の授業が好きと回答した生徒は53.6%と約30ポイント低い。
- (2) 学習指導要領に示された「態度」の内容については、肯定的な回答の割合が高く、上記の「好き」以外の項目については80%を上回っており、十分に習得できている。
- (3) 学習指導要領に示された「知識、思考・判断」の内容については、60%から70%の生徒が肯定的な回答をしており、概ね習得できている。
- (4) 学習指導要領に示された「技能」の内容については、「基本打突の打ち方と受け方」は、すべての項目で肯定的な回答をした生徒の割合が70%を上回り、概ね習得できている。しかし、「基本となる技」は、「二段の技」が60%を上回っているものの「引き技」と「抜き技」は下回っており、攻防についても課題がある。

【改善に向けて】

1 剣道の授業を好きにし、技能の向上を図るための手立て

- (1) 導入段階で、相手の動きを予測する「剣道じゃんけん」や打つ動きを確認する「新聞紙切り」などを取り入れるなど、楽しく学習できるようにする。
- (2) 積極的な打突学習を保障するために、動きづくりの学習の段階では木原ら（2009）の当たっても痛くない簡易竹刀を使ったり、長さが短く軽い小学高学年用や中学年用を用意したりするなど、教具を工夫する。
- (3) 単調になりがちな基本動作や技の練習では、技を打つ機会を指導するとともに、例えば「面抜き胴」のできばえの判定試合を取り入れるなど、試合形式で行う。
- (4) 剣道では攻撃と防御を同時に行わなければならない、身に付けた技を試合で生かすことができないという課題があるので、相手の動きを予測・判断しやすくした「攻防交代型の試合」という教材を取り入れる。

2 思考・判断を高めるための手立て

基本動作や基本となる技の動きづくりの学習場面では、発問や学習資料を工夫したり、グループ活動を取り入れたりと、動きを比較させる。

技の動きづくりや攻防の学習場面では、相手の構えを崩す方法や打つ機会を見付ける活動を取り入れるなど、「思考・判断」する時間を確保する。

上記を取り入れた各学年9単位時間取扱いの指導計画を作成し検証する。

プロフィール：流通経済大学 スポーツ健康科学部 教授、1984年茨城大学を卒業後、茨城県公立中学校に20年勤務し、2004年から茨城県教育委員会指導主事を6年務め、その間、中学校学習指導要領（保健体育）の改善等に関する調査研究協力者として、改訂作業に携わる。2010年から現職。専門は体育科教育学。主な著書は「これならできる剣道（スキージャーナル社）2014」（共著）、「新・苦手な運動が好きになるスポーツのコツ②剣道（ゆまに書房）2013」（単著）など

『「武道等指導推進事業（武道等の指導成果の検証）」調査報告書』を受けて一中学校武道必修化に伴う武道（相撲）指導の成果と課題一

満留 久摩（東京都立足立新田高等学校 主幹教諭）

1 中学校武道（相撲）指導に関する調査結果の概要

授業で相撲を行っている中学校の比率は男子 3.5%、女子 2.6%であった。相撲の指導経験がある教員は非常に少なく、実際に授業で相撲を行っている抽出校 30 校の教員に限定しても、相撲を専門としておらず、少ない指導経験で授業を行っている者が多いことが分った。相撲を行っている中学校のほとんどが 1・2 年次に平均 9 時間ずつの授業を行っており、またその半数以上が 3 年次にも授業を行っていることが分った。

相撲の抽出校を対象に、教員と生徒との回答を比較する形で検証した授業内容についての調査では、全ての教員が相撲を好きになるように指導をしているが、実際に相撲の授業が好きだと回答した生徒は 5 割程度にとどまった。習得の状況に関しては、「態度」「知識、思考・判断」で概ね良好な結果であったが、課題解決型学習をうまく進められていないことが分った。また、「技能」では、基本動作は十分に習得されているが、受け身および基本となる技は習得以前に、指導さえ十分になされていない実態が浮かび上がった。その一方で攻防の展開については大部分の学校でなされていることが明らかになった。技能の習得が十分でない理由としては、「指導者の指導力の問題」をあげる教員が最も多かった。

2 今後に向けて

本調査の結果から導き出された授業改善のポイントは、①技能指導の充実【技能】、②愛好的態度の育成【態度】、③課題解決能力の育成【知識、思考・判断】である。私は、ここで、今回の調査でも明らかになった、「限られた技能でも攻防の展開が可能である」という相撲の特徴に、今後の授業改善の糸口を見出したい。この特徴は、技能の学習→簡易試合→課題の発見→課題解決に向けた思考と試行→新たな技能の学習という授業の流れを創出しやすくするからである。ただし、そこには、すぐに簡易試合を行えるだけに、それに甘んじ、新たな技能の指導・習得が十分に進まず、結果として攻防が単調化し、生徒の意欲や愛好的態度が削がれてしまうという陥穽が潜んでいることも忘れてはならない。攻防の中でのつまづきを課題と捉え意欲的に新たな技能学習につなげていけるよう、教員が、いかにして生徒の学習活動の質を見取り、時機を捉えた適切な指導や支援を行っていけるかが鍵となろう。そのためには、授業における指導という視点で再度相撲技能の体系化を図り、取り扱う技能の内容の精選と順序の再検討を行うこと、そして各学習場面に応じた具体的な技能の指導法を案出していくことが急務であると考え。

このように指導歴の浅い非専門家の教員でも 3 年間を見越して計画的で効果的な指導ができるよう、これまでの「相撲」の常識にとらわれぬ授業改善の取り組みを積み重ねていくことで、次期学習指導要領の改訂に向けての具体的な視点を見出ししていきたい。

プロフィール：昭和 51（1976）年東京都生まれ。東京都立足立新田高等学校主幹教諭。担当教科は保健体育。小学 2 年時に（財）日本相撲協会錬成道場文京支部にて相撲を始める。平成 12 年埼玉大学教育学部卒業後、現任校に着任、相撲部を創部し以来監督を務める。現在、（公財）日本相撲連盟中学校相撲授業指導法研究委員として相撲授業の普及発展に努めている。その他、（公財）日本相撲協会指導普及部指導員、JOC 強化スタッフとしても活動中。